

# 民俗学への旅

## 1. 松本の神々—稲荷社—

市東 真一

近年、「政教分離」の名の下で、それ以前から町内に存在していた神社、お堂、さらには民俗行事の費用を町会から出すことについて反対の意見が上がっている。

これは、松本市内の問題だけではなく、残念なことに日本中で起きている。この動きに関して、民俗学者である私は、非常に危機感を抱いている。なぜなら、町会で管理されてきた神社、お堂、民俗行事に関しては、古文書などの文献資料にはない歴史的な情報が非常に多く存在しているからだ。これまでの歴史というのは、大多数が支配者的な立場の人びとがまとめたものであり、庶民が日常の様子などを書き残したものはほとんど存在しない。さらに、神社、お堂などには歴史に名をはせた偉人ではない、その時代を生きた名もなき人々の名前や職業などの情報が多く存在している。いずれも、私たちが一番知る必要のある、一般の人びとが何を考え、何を感じ、どのように生きてきたか、ということの歴史に関しては、ほとんど残っていないのが現状である。これらの情報においては、一度失われると二度と復元することは不可能である。その他に、もともと日本の社会集団においては、信仰的な集団から派生していった歴史もある。現に“社会”という言葉は、神社の会合をさす神道用語であるのだ。私は、現在この状況を明治時代の廃仏毀釈と同等の事態であると考えている。

私が住む松本市内には、多くの稲荷社が存在する。これらの稲荷社は、ほとんどが個人や町会、または企業で管理されて存在している。稲荷社と聞くと、狐を祀る祠という人がいるが、実際それは間違いである。稲荷信仰において、狐というのは神使（神の使いの動物）であり、神そのものではない。稲荷とは、もともとは「イネナリ（稲成り）」が崩れて「稲荷」になったといわれている。つまり、もともとは稲作の神なのである。しかし、稲荷社が多く存在するのは町場の商家

である。それは、豊作祈願から転じてよろずのものを栄えさせる神と解釈されたことが要因である。また、陰陽説において稲荷神は、火の神とする考え方もあり、火事の多い町場では火事除けの神としても信仰されていた。さらに、もともと従五位であった神格が昇進して正一位となったことから、武士の間では出世の神として信仰されていた。このように稲荷の信仰形態は様々な形で存在している。

この稲荷社は、稲荷講と呼ばれる講社に加入している人びとで信仰されることが非常に多い。この稲荷講は、稲荷社の存在する町内以外の人びとも加入することが多い。また、この稲荷講と町内会は表裏一体の関係にあった。松本では、稲荷講の会合などを通して町内のことを決めることが行われていた。つまり、町内の社会組織と稲荷信仰は切っても切り離せない関係にあった。それなのに、それを無理に分けるとするのは、それまでの歴史を否定するとともに、残るはずであった資料を歴史の闇に葬ることに等しい。日本の社会組織においては信仰的な存在があるのが当たり前である。しかし、それは当たり前すぎて誰もがその理由について知ることはなかった。そのため、そこを攻撃されても明確な答えのないまま、丸め込まれてしまう。しかし、それは地域独自のものであり、それを否定することは、土地柄やその地域の歴史を否定することにつながる、と私は考えている。

大学院を出て早二年の月日が流れた。近年は、学会などでの発表の他に、民俗学者ということで一般の人びとの前で講演する機会も増えてきた。また、今まで大学で学んだ事で自分は当たり前だと考えていたことが、実際には一般の方々が知らないことが多くあることもわかった。今後も、地域の歴史や文化について、報告していきたい。



（神奈川大学日本常民文化研究所  
特別研究員

松本市在住